第３期ウィズあかし運営委員会

第２回ウィズあかし専門委員会議事録

2024 年 1 月 31 日（水）18：00～20：00

複合型交流拠点ウィズあかし　8 階 803 学習室

参加者：専門委員　6　名　明石コミュニティ創造協会スタッフ　7　名

１．開会のあいさつ

〈事務局〉

本日はお忙しいところ、遅い時間帯にも関わらずご出席いただきありがとうございます。

現場スタッフは試行錯誤しながら取り組んでいる中で、前回からウィズあかし専門委員会が始まりご議論いただくことでブレイクスルーするためのいろんな視点をいただけている。この場は、大変ありがたい場だと思っている。

本日は、みんなでつくるウィズあかしを考える会の報告もあるが、男女共同参画をテーマにしたい。日頃、ウィズあかしに対して声を挙げてくれるのは、市民活動や生涯学習で関わっている人たちが多いが、男女共同参画については市民からの声が比較的届きにくい。しかし、生きづらさを感じている方もいる中では、男女共同参画をテーマに議論するのはとても大事である。

本日は男女共同参画をテーマに議論を行いたいと思っている。年度明けからは市民活動や生涯学習を予定しているが、いろんな見地からご意見をいただきたい。率直にご意見をいただければと思うし、我々スタッフも勉強しながらディスカッションさせていただければと思っている。

２時間という長い時間にはなるが、よろしくお願いしたい。

２．１)本日の趣旨説明

事務局より口頭で第２回ウィズあかし専門委員会の趣旨説明及び配布資料の確認を行った。

２）自己紹介

専門委員６名及び明石コミュニティ創造協会スタッフ 10 名が自己紹介を行った。

３）前回のふりかえり

事務局よりスライドを使用して、第１回ウィズあかし専門委員会の振り返りを行った。

３．報告

事務局より「ウィズあかしの男女共同参画推進の現状・認識している課題」について、スライドを使用して報告を行った。

４．質疑応答及び意見交換

〈専門委員〉

アサーティブコミュニケーションはカウンセラーやコーチング的な玄人を育成するものなのか、

それとも自分の意見を抑圧されている人が自分を出せるように支援的なコミュニケーションをすることなのか？

〈職員〉

コミュニケーションが取りにくい、自分の気持ちを上手に伝えられなくて溜めてしまう人たちが、自分の気持ちを抑え込むのではなく、自分や相手も尊重しながらお互いが伝え合うことができるような講座になっている。講座を受けた後、参加者みんなでロールプレイングしながらトレーニングを行っている。

〈専門委員〉

わかった。ミモザの会（語り合い）はどういったものなのか？

〈職員〉

これはグループ相談のことであり、相談員がファシリテーターとなり、複数の方が集まり１人対多数で相談を行う。

〈専門委員〉

１人対多数で実施することでどのような効果を期待しているのか？

〈職員〉

他の人も同じように悩み、頑張っていることに気づき、相互に助け合うことを期待している。

〈職員〉

例えば、引きこもり支援では、自分はもう復活できないと思っているような３年引きこもっていた人が当事者同士のグループの中で７年引きこもっていた人の話を聞くと「自分は大丈夫なのではないか」と気づきがあることがある。相談員だと依存関係になりかねないところが当事者同士での気づきの方が大きいことがある。相談も大切ではあるが、ステップアップしていく機会として、当事者同士が気づき、徐々にエンパワーメントしていく場を提供することに力を入れている。

ただ、ドーンセンターのように上手くいっていないところもあるので、そのあたりはアドバイスをいただければと思う。当事者同士の場で、スタッフがファシリテーターをするのは難しいが、そこを模索しながらやっている。

〈専門委員〉

まずは全体の感想になるが、非常にたくさんの取り組みを行っている印象である。自分たちの事業を分析して、話し合っている男女共同参画センターがどれくらいあるのだろうと思った。そのぐらい大変良くされていると思う。

グループ相談は難しい。例えばグループの中に DV から離婚を経験した人が、３年や５年も同じ悩みを持つ人や乗り越えた人とつながることでエンパワーメントし合う。定期的に集まる場があり、その中でいい関係ができ、徐々に話したいという雰囲気になれば、元気になってくる人が出てくる。定期的に開催していて、いつでも戻ってこれる「場」があるということが重要である。スタッフとして関わりがいい形で回る時もある。相談者はいろんなことを抱えており、トラブルも起きやすく関係性が難しかったりするので、専門職の方が深いテーマの際は定期的に関わっている。

現在ドーン財団では行っていないが、以前に行った時はそういったことにも配慮しながら、頻度やテーマ等についても担当のファシリテーターと相談しながら進めていった。当時はいくつもの登

録団体が担当していて、「働く女性たちの悩みの会」や「女性リーダーとしてガラスの天井にぶち当たっている人たちの会」「子育て中のモヤモヤを見ようの会」などがあった。そのテーマ設定はいろいろあってもいいが、自分たちで十分やっていける会があってもいい。

〈専門委員〉

講座の企画内容として漏れているものやあるべきものが抜けているとか検討するにあたり、どのように行っているのか？

〈職員〉

今年度は、主に相談員から上がってきたニーズからの企画である。今後は男女共同参画施策として、啓発的な講座も組んでいかないといけないと思っているところである。

〈専門委員〉

明石市の担当から重点テーマや実施して欲しいという指示はあるのか？例えば、災害対策や虐待・DV などの関連する講座の実施、男性の参画などこれだけは押さえてほしいみたいなのはあるのか？

〈職員〉

明石市からはピンポイントでこの事業をして欲しいという指示はない。

〈専門委員〉

では自由に実施できるということですね。

〈専門委員〉

基本的な概念としてあかし男女共同参画プランの施策のビジョンがあるという位置づけになる。

〈専門委員〉

男女共同参画プランはすべてにおいて語っているものである。その中で市長の方針だったり、市として特に注力したかったりといった事業を男女共同参画センターに行ってほしいという自治体もある。

〈職員〉

現状だと我々の窓口としては市民生活局の中の男女共同参画課になっている。しかし、明石市の場合、同時に政策局の中に SDGs 推進室がジェンダー平等推進を担当している。明石市は長期総合計画を SDGs 推進計画にしたこともあり、SDGs 推進は政策が持っている。そのため、ジェンダー平等の施策は市が一本ではやっていない。例えば、女性リーダーの育成は政策局のジェンダー平等推進の担当が行っている。２部局に分かれているところは現在、市も課題であると思っていて、前まで男女共同参画課が所管していた男女共同参画プランについて、あかしジェンダー平等推進計画として昨年策定されたところである。その中に男女共同参画プランを含んでいる。いずれにしても男女共同参画にかかわる窓口が２つあるのが明石市の現状である。

加えて、ウィズあかし全体の指定管理は６年前に始めたことである意味で先行しているところもあり、市からこういったテーマでして欲しいという話はあまりない。LGBTQ+の取り組みとして明石にじいろキャンペーンを一緒にやって欲しいといったようなことはたまにあるが、男女共同参画センターとして市からの指示は特にないという状況である。地域支援の延長で、地域の人から防災を通じて男女共同参画を推進したいという相談を受け、講座を実施したといったような動きはある。

現在、講座は現場の相談から必要な事業を企画しているが、実施するボリュームにも限界があるため精査せざるを得ない。また、女性活躍推進ということで、対企業向けの男女共同参画の意識啓発や働き方改革などの取り組みはあまり実施できていない。

〈専門委員〉

LGBTQ+については、政策局担当なのか？

〈職員〉

政策局になる。

〈職員〉

ジェンダー平等推進室からこの時期に委託事業として講座を実施している。

〈職員〉

ジェンダー平等推進室ににじいろ相談室があるので、LGBTQ+の相談はそこが持っている。

〈職員〉

その様な現状もある中、男女共同参画センターとしてのあり方としてこうあればいいというご意見もいただければと思う。

〈専門委員〉

先ほどの話にもなってくるが、あかしジェンダー平等推進計画の方針はかなり攻めた内容だと思っている。今回の資料の男女共同参画の取り組みを拝見して、個人のエンパワーメントとしてパワーレスの状態から自己決定していくという支援の割合がすごく高いのだと感じた。一方で、一般の人からすれば遠く、どちらかと言えば福祉よりに見えてしまう。もしかしたら、そういうイメージになってしまっているかもしれない。それは相談者にとっては入りやすいかもしれないが、そうではないニーズを持った人にとっては近づき難い存在になってしまうことものかなと感じた。

〈職員〉

それも課題のうちで、啓発事業については一般の方もだが、むしろウィズあかしを知らない人にも来ていただきたいところである。しかしながら、なかなか手が届かないところはある。その辺りをどうしたらいいのか、こちらも同じように課題感を持っている。

〈職員〉

我々ではなかなか手が届かないところを他機関と連携していかないといけないと思っている。これらを課題として挙げているが、どういったところにつないでいくか、どのように情報発信していくのかの話もある。

〈専門委員〉

他団体との連携の話でそれが課題ということだが、そもそも他団体の情報が少ないのか？

〈職員〉

他団体の情報が少ないこともあるし、アプローチをどうしていくのかその仕方の両方課題だと思っている。どのような団体と連携していくのが適切なのか。相談事業は割とはっきりしていて、その方の支援に関わるところの情報提供を適宜行うことができるが、講座や啓発に関してはその後ろに控える人が広報して広げる形もあるが、企業に関してはどのようにリーチすればいいかわからないし、どのような企業を選択すればいいかもわからない。一般的に何かあれば教えてほしい。

〈専門委員〉

一般の企業は難しく、例えばドーンセンターで共催したことがあるのは、企業の広報部門の担当者の勉強会である。定期的に開催していた。そこは任意団体なので、そういったところと共催すると各企業の広報担当とつながることができる。あと商工会議所とつながることができれば、女性部や青年部と一緒に活動することで広がっていく。

〈職員〉

そのような団体は貸室を利用していたりしている。

〈専門委員〉

そこからアプローチするのがいい。あと民間企業であれば、お客様相談窓口の勉強会がある。そこはドーンセンターでも会場を使っていて、お客様の声をサービスに活かしたい、地域に活かしたいと思っているので、そこと連携するので上手くいったことある。貸室の利用者でアプローチできそうだったら、ぜひ取り組んでいただければ。

〈職員〉

まちづくりにおける団体との連携は、みなさんにも意見を聞いてみたい。タウンミーティングの開催でファシリテーターとして地域に入っていく中で、そこの参加者から不登校の当事者のサロンを立ち上げた人がここ最近増えていると聞いた。話を聞いてみると同じエリアの中で活動している人同士はあまりつながっていない。

〈専門委員〉

不登校については、家族の中に不登校がいる場合、その思いをどこに言えばいいのか負担に思っていて情報やつながりを求めている。そこにはジェンダーの問題も絡んでくる。だから、こういうセンターであれば話しやすかったりすると思う。明石の中にそういうネットワークができていくと広がるのではないか。

〈専門委員〉

新聞社に深夜電話がかかってくることがある。出てみると子どもが理不尽な目にあっていることを切々と訴えられるが、子どものことより母親の気持ちを受け止めるところがないといけないと思う。割とシングルの方が多く、話す相手がいなくて家で１人抱えて混んでしまうケースも少なくない。LINE の相談があれば、気持ちを吐き出せるのかなと思う。

〈職員〉

相談員の中でも LINE による SNS 相談などを実施できればという話もあるが、小さな一つのセンターで実施に踏み込むのは難しい。本当は兵庫県全体で連携などがあればいい。

〈専門委員〉

兵庫県の男女センターは広域センターとしての役割があるが、連携やネットワークはあるのか？

〈職員〉

それぞれの市町の悩みを共有する連絡会程度である。その他、県が市町に支援するのはチャレンジ相談程度である。兵庫県自らの動きはあまりない。

〈職員〉

県の連絡会に参加しているが情報交換するだけで、SNS 相談を広域的に実施する動きもない。

〈専門委員〉

女性の企業支援に力を入れていきたいという話だが、ここの男女共同参画センターは裾野のケアが充実しているので、むしろそこに特化をするのでいいのではないか。そこの参加人数が少ないとかはあまり疑問に思わなくていいと思う。企業支援の講座を実施するならば、それは商工会議所に任せればいいのではないか。収支や参加者数では捉えられない取り組みをしていると思う。ただ、連携先を見た時、もっと間のグラデーションのある連携先を持たなければいけないのではないか。例えば、引きこもりだった子がすぐに就職活動する前にインターンを受け入れるようなところと連携するとか。アサーティブコミュニケーションやミモザの会もそうであるが、支援する側と支援される側を分けている。支援される側と思っていた人が実は支える側になることもあるので、そのような連携先があると良いし、そういった先があれば次にいけると思う。むしろ連携する相手というのは、地域の NPO など、こういった活動に理解のある方々を目指すほうがいい。企業として受け入れるというよりは、支援することを目指す類似団体と手を組むことを進めていく方が就職の手前につながると思う。

〈職員〉

起業セミナーについては、就業相談に来られる方の中には働いているが副業的にしてみたいとか、外に出られないがＳＮＳで何かやってみたい方に向けた講座として実施している。

〈専門委員〉

それはタイトルの問題かもしれない。

〈職員〉

起業準備やプチ起業みたいなことをテーマに実施している。

〈専門委員〉

そういう形で連携先を見た時に、最近生駒市でこども食堂を運営している駄菓子屋のチロル堂が不登校の親子のコミュニティとしてトーキョーコーヒーを全国的にも展開した。明石のトーキョーコーヒーやこども食堂、県立のピッコロシアターなどと相談すれば、協力してくれると思う。連携相手を求めている団体も意外と多いと思うので、そこと交流して相談員がそっちに何が提供できるかも踏まえてギブアンドテイクで考えた方がいい。本日の話を聞いていて、誰と連携するのか、どういうアプローチをするのかを考えた方がいい。

〈職員〉

今、ブックスポットの更新に向けてヒアリングを行っているが、日中働いていない人や失業中の人の居場所になっている面がある。昼間に来て誰とも話さなく、負い目を感じない場所が地域のなかに点在しているというのは実は大切なのかもしれない。

〈専門委員〉

困りごとがあっても、ブックスポットは本のために来ている名目で言いやすく、居場所としての機能が果たせると良い。

〈専門委員〉

電話で相談を受けた時に、地域支えあいの家の担当者に会い、話を聞いて頂けて気分が晴れたと言っていた。

〈職員〉

地域支えあいの家は、中学校校区にある総合支援センターよりもさらに身近な相談窓口を作ろうということで、市がパイロット事業として実施した事業で、現在松が丘・花園・沢池の３か所にある。

〈職員〉

そういう方々にジェンダーの視点を持ってもらうのが難しい。例えば、こども食堂や中学校給食を地域で市が実施しようとした時に反対するのは、意外と 70 代や 80 代の女性だったりする。それはなぜかというと、自分たちは弁当を作ってきたという自負心が強く、若い人たちの活動が潰されてしまうことが地域では起こってしまう

例えば、民生児童委員の方々にジェンダー教育をできたらいいと思ったりする。そういうのをしなければ、地域支えあいの家はシニア層の集まりの場になりがちなので、下手したら２次被害になりかねない。

〈専門委員〉

自分が大変な思いをしたから、次の人にはサポートしたいという人も出てきているので、そこを上手く救えたらいいと思う。

〈専門委員〉

古い考え方を持つ人とのギャップは確かにある。

〈職員〉

そういうところへの普及啓発に力を入れないといけないと思っている。相談は重要ではあるが絆創膏を貼っているような対処療法にしかならない部分もある。社会全体がそういうことを受け入れる雰囲気づくりをどうしていくかはまだまだやれていない。男女共同参画への意識づけとして、映画観賞会を明石シネマクラブとコラボして実施しているのは、そういうシニア層に対して少しでも意識してもらう狙いはある。

〈専門委員〉

ジェンダーの講座や研修の講師をスタッフがすることは可能なのか？

〈職員〉

そこまでは、難しいところである。

〈専門委員〉

連携の仕方のひとつと思っていて、スタッフが講師をすることで関係性の築きや考え方を伝えることができる。

〈職員〉

その場合は、むしろ市民活動団体の力を借りてその活動に対して助成するのがいいかもしれない。

〈職員〉

現在、市民活動の助成金制度の見直しを行っている。助成金の課題として税金を払っているから、助成を受けられると思っている人たちがいる。自分の活動がどう社会や誰かに影響しているかという視点を作るのが難しいと感じる。例えば、テーマを設けて、それが実現できた団体は１年後表彰する助成金制度はどうかと考えている。地域の男女共同参画の啓発にチャレンジして、面白い活動

をしている団体に対して表彰するようなはどうかとチームの中で話を始めている。もしかしたら、そのひとつのテーマが男女共同参画ではないかと思っている。

〈職員〉

明石市の市民活動助成事業を使って、登録メンバーズが NPO 法人向けの講座を実施しており、もしかしたら市民活動事業としても支援や、生涯学習として講師を育成することもできるのではと思っている。

〈専門委員〉

かつては、夫婦で悩みごとを語り合うエンカウンターグループがあった。そういった語り合う会はそれに近いのかなと思う。男性の参画というと重たくなるが、よりよい家庭づくりという言葉ならお互いが歩み寄る。まずはゆるい入口の男性も入れる感じにしてお互いの本音を言える場を作るのがいい。男性はこの問題に対して来るだけでもハードルが高い。普段、仕事が忙しくすれ違っている夫婦の関係を１回見直してみませんかという話をする。みんな忙しいし、すれ違いの時間が多く、話をしない夫婦も多いと思うのでそういう場が必要であると思う。

あと、不登校対策については、南あわじ市の学ぶ楽しさ支援センターにおいて「子どもたちの第三の居場所」に取り組んでおり、運営はソーシャルデザインセンター淡路と一緒に実施している。顔が見える関係で父母の会を作ってもらい、ファシリテーターは参加者にやってもらっている。そこにはスタッフは入らず、サポートはするが、運営は親同士で取り組んでいる。できるだけ主体的に参加者にやってもらうことで、それが将来的には自立につながると思っている。日本全体がそうであるが親切すぎて、それが学び手の主体性を奪っていると思う。丁寧なワークシートを作れば、作り手の望むようなアウトプットにはなってくるが、それが本当に主体的で多様的な深い学びにつながるかというとそうではない。その辺も含めて考えないといけない。どれだけ本音トークができるかのところである。

〈職員〉

団体の自立における継続支援をどう手を放すのかという話だと思う。最後の出口のところは、自分たちで考え、主体性を育むために生涯学習という分野で連携できるところはあるかもしれない。団体の支援で相談に来られる方もそうであるが、来られた方の手を差し伸ばして一緒にどうするか、生涯学習のところから自立につながるようなケースはあるのかどうか。

〈専門委員〉

多可町でＰＴＡの語り合いの場を実施した際に、教育委員会より整理したものが出てきた。そこでの発言を整理した中でステークホルダーの方がまちを良くするために、それぞれいろんなことを考えていることが見えると、この人とタッグを組んだほうがいいというのが見えてきて、本当の意味での連携が見えてくる。どうしても日本は時間もないし、結論を急ぐところはあるが、人生 100 年時代と言われる中、時間をかけて育んでもいい。人の営みはそこにあるのだから、本当に豊かな社会や生活を育むためにどうすればいいのか。財団としてある程度成果を出さないといけないが、個人のマインドの部分は自由であり、そこを育んであげる。今の日本の状態を見ていたら、そこが必要と考える。

〈職員〉

それはその通りだと思う。当事者同士の話し合いになった時に、何かもやっとしたり、意見が対立してぶつかった時に気づきがあったり、乗り越えられた体験につながったりするが、それはその通りだと思う。しかし、元々メンタルが弱く生きづらさを感じていて、自分の思いを言語化することに抑圧されてきて言葉に出すことだけでも時間がかかったりする方々がサロンに集まった時にどこまで介入するのか、そこの難しさがある。ファシリテーションをしすぎると受け身になってしまう、親切すぎると学ぶ力を奪ってしまうことにもつながってくる。介入しないとバランスが非常に難しいが、その辺りはドーンセンターでどうしているのか。

〈専門委員〉

どんなグループかにもよるが、安心安全な場がそこにあって、定期的に開催されている。いつ行ってもいい場所があるという安心が大切だと思う。来た人も何とかしたいというよりは、元気になって本来持っている力が引き出されば良い。その後、また地域の中でそれぞれ自分で展開していく。しばらく来ないと思ったら、その間にこんなことやっていましたという方もいるので、あんまりそこまで責任を負わなくていいのではないか。安心安全に共有できる場があるだけでいいのではないか。

〈職員〉

多分ブックスポットがそこにつながると思うが、そういう意味では定期性や、テーマにこだわらず、同じように常にその場があるということが大事ということだと思う。

〈専門委員〉

そういうのもあるし、しっかりやろうと思ったら定めてやるやり方もあると思う。よっぽどの専門職の方が関わっているのでなければ、関わったことで蓋を開けてしまい、どこで卒業するのかというのが難しくなる。それは専門機関につながないといけない。いわゆる男女共同参画センターというのは、安心安全の場で、そこで働いているスタッフはここに来る人がどんなことを抱えているかを想像して対応している。利用者は安心安全ないい場ということで来ていると思う。その場を提供するだけで十分である。もし、その中でご自身が自分で得て、元気になって帰られたら、また地域の中で活躍される方もあると思うし、難しければ専門の相談機関につないでいく。コーディネーターがスタッフの役割だと思う。

〈専門委員〉

依存度が高い人たちを卒業させるのは難しいと思う。かつては依存度の高い人をどのようにしていたのか？あとスタッフのメンタルケアが気になる。吐き出す機会を作ったほうがいいと思う。

〈専門委員〉

ドーンセンターでも事務局としてスタッフのメンタルケアをしないといけないので、そこまで責任を負わなくていいと引いている。専門家のスーパーバイズをスタッフが受けて、「この人を変えることは無理がある」ということを自覚する機会を得ている。場の提供や運営だけでいいと思う。依存の関係でいうと、心理や福祉の専門職の方の領域であり、男女共同参画センターとしてはそこまで入らなくていい。話を聞いて問題の整理し、いろいろあると思ったら、専門機関へつなぐことでいい。ここは入口だと思うので、それ以上は皆さんが負わなくていい。

〈専門委員〉

ソーシャルワーカーとカウンセラーなどの専門スタッフがいないとしんどいと思う。どういうケアが必要なのか、どこに繋げたらいいのかは専門家の領域。最終的に専門家へつなげることが必要である。

〈職員〉

今年度からほっとラインに変えたのは、そこがひとつの理由である。ただただ話を聞いてもらいたい人たちには申し訳ないが、現状そこまで男女センターとして引き受けられない。そこは精神疾患の機関や心のケアセンターの役割である。ウィズあかしのマンパワーの現状を踏まえ、ほっとラインの時間を切り替え、むしろ面談にどうつなげるのかを重要視して取り組んでいる。現場ではケアの必要な方々を何とかしないといけないと思いがちだが、そこまで負わなくていいのではないかという線引きの意見は非常にありがたい。

〈専門委員〉

実施している取り組みから言えば、そっちに重きを置いているように思っていたが、このエンパワーメント図で言えばどこに位置づけられていて、現状からこっち側にいけばいいのではというのはあるのか。

〈職員〉

目の前の相談においても重いケースがあってどこまでしたらいいのか線引きが難しくて、相談を受けたら引き受けてしまいがちになる。

〈職員〉

実際に相談に来られる方は「消えてしまいたい」という発言をされる方やＤＶの方など、いろんな思いを抱えている。

〈専門委員〉

相談には自己否定感を持つ人が来ている現状がそうであっても、真摯に受け止め過ぎると引きずられるので、そこは専門に任せていけばというのが仁科専門員や大本専門委員の意見である。

〈職員〉

最近はそのあたりをかなり意識していて、専門機関につなぐようにしている。

〈専門委員〉

20 年前の男女共同参画センターは社会参画というかなり右側の啓発をしていく場所のイメージがあったが、近年は変わってきていると感じる。

〈専門委員〉

以前は割と学習型だったが、課題解決型というステージになってきている。社会情勢からするとリーダーシップもあるが困難を抱える女性や子育ての問題もありそれだけではない。行ったり来たりになっている。疲弊している人が何かのきっかけで変わったりもする。ＤＶなどで疲弊している人が、何か違う生活をするのか、離婚するのか決定ができたら変わってくる。確かにこのエンパワメント図の通りになればいいとは思うが。

〈専門委員〉

宝塚市で細川貂々（てんてん）さんという「ツレがうつになりまして。」の作品を描かれた漫画家が「生きるのヘタ会？」を定期的に実施している。そこに集った人が自分の生きづらさを吐き出

している。それをネットの掲示板に「私はこんなことに悩んでいる」という形で紹介している。そういうのを案内してもいいのかと思う。自分だけかと思っていた悩みも他の人も悩んでいることがわかることもエンパワーメントになると思う。

〈専門委員〉

あとネーミングも大事であると思う。今は応急処置的なことが中心だが、一方でこういう状況を作らないための啓発活動も大事である。そこは SDGs 推進室に任せることもありだと思うが。一般的な感覚として、男女共同参画や人権という言葉は近づきがたいところはある。それを前面に出すのではなくて、この映画を観たら楽しいというメッセージがあるぐらいがいいと思う。

10 年ぐらい前に、指定管理に入る前の男女共同参画のイベントに参加したことがあるが、それは元なでしこジャパンの選手がプロサッカー社会でどういう思いをしたのかという講演会であった。そこの参加者は市民活動をしているシニア層の方でほとんどが女性だった。話を伺ったら、中高生に聞かせたい内容で、もったいないという感想だった。見せ方として男女共同参画という言葉を小さく書いて、みんなの興味があることをタイトルにすれば、様々な層も参加するのではと思う。

〈職員〉

複合型であるからこそ、その良さを活かせるところだが、まだまだできていないと思った。

最近、明石市内の文化施設が集まったネットワークがあるが、どう連携していくか、手をつなぐ先について話をしている。もっと上手く中も外も連携していくために他機関をもっと違う視点で見ていくのがいいと本日の話を聞いて思った。

〈専門委員〉

特に男女共同参画となると警戒する人が出てくる。

〈専門委員〉

男女共同参画センターは、女性が周囲の目線を気にせず、話できる場というイメージがある。男性は女性以上に難しい。

〈専門委員〉

明石くらいのエリア感で地域の場で男性が本音を話すことは難しい。ドーンセンターであれば広域なので男性向けに「心が折れない男の生き方」という講座を実施したが、100 人以上の参加者がいた。大阪だけではなくて、兵庫県や滋賀県などの近隣からも来ていたので顔が割れないが、地域で実施すれば難しいところはある。父親と子どもの子育て講座を卒業式シーズンに実施したが、それは少数しか来なかった。

(職員)

明石では親子の講座となればたくさんの参加がある。料理教室であればもっとたくさんの参加がある。

〈職員〉

加古川であった男の生きづらさのセミナーに参加した。女性も参加可能で約 30 名の参加がある中、男性の電話相談を受けている方も参加していた。

〈専門委員〉

センターの周知の問題もあると思うが、ここが何をするのかという検討は必要である。

〈職員〉

パワーレスの方に対しても支援しないといけない中で、普及啓発をどうしていくのかを考えていく必要がある。そこは男女チームで考えるよりは、市民活動チームが引き受けるとかも考えられる。むしろ起業相談などはそうかもしれない。最初の窓口は男女チームでいいかもしれないが。そういう意味では生涯学習と市民活動を一緒に抱えているのは大きな強みである。実際にそういう動きもあるが、むしろそこの連携はもっと考えないといけない。

〈専門委員〉

今日は男女共同参画のストーリーの中で、それぞれの担当がどこなら担えるのかという話があった。前回はウィズあかしとしてのビジョンの中で、複合型施設でお互いが役割分担をする話があった。そうではなくて、それぞれの主体のビジョンの中で、役割分担をしたうえで、それぞれのストーリーに対して他がどう協力できるのか、それを調べると一石三鳥になると思う。そういう動きがあれば組織の中でも循環していくと思う。

〈職員〉

そろそろまとめに入りたい。

〈職員〉

現場ではどうしても目の前に来られる市民の方と対峙する中で、できるだけケアして繋いでいることがウィズあかしの特色でもある。講座や相談をする中で、どこまでしていくのかのジレンマはあるが、まずは明石市内や県域としっかり手をつなぐことがまず一つであると思う。

〈職員〉

時間になったので、次第に沿って今後の予定についてお伝えしたい。次のテーマであるが、そこは内部で検討して、皆さまにはお伝えする。最後に閉会の挨拶を頂いて終わりたいと思う。

5．閉会のあいさつ

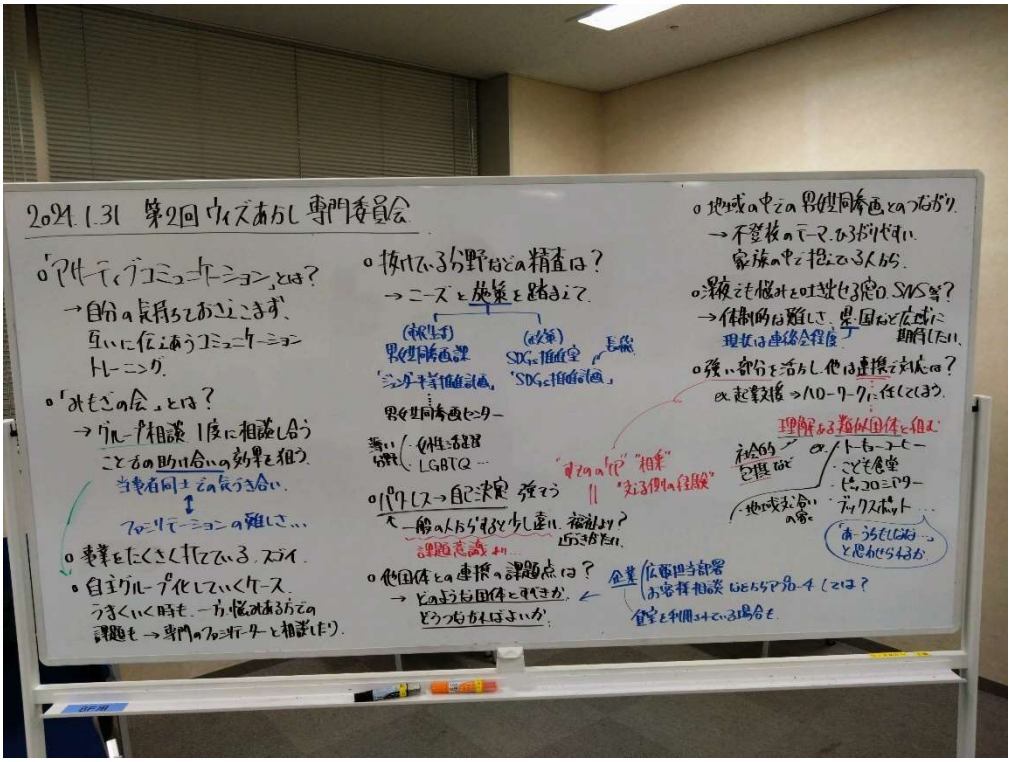
〈事務局〉

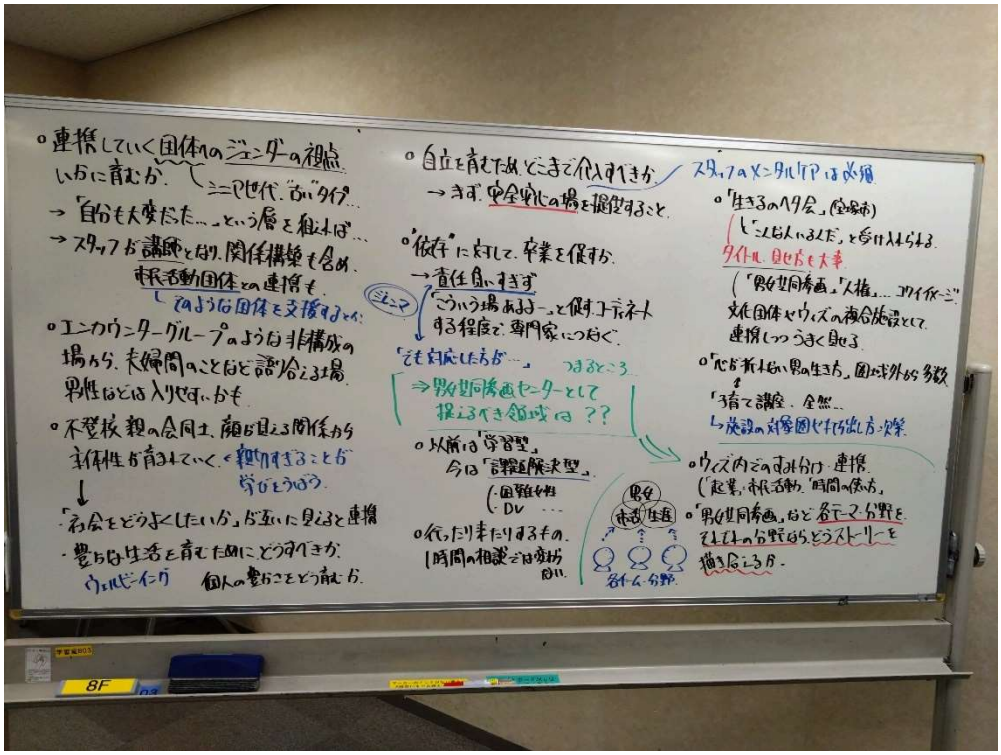
あっという間の２時間の中、熱い議論をいただきありがとうございました。

いろんなご意見をいただき、たくさんのヒントを頂いた。コミ創が頑張っているというご意見は大変嬉しかった。男女共同参画センターとしてはどこかで線引きしないといけないし、負いすぎないでいいと言っていただけた。専門家につなげる線引きの話など、いろんなヒントをいただけたと思っている。この４月から困難女性支援法も始まる。男女共同参画センター全体として、課題解決のところが色濃くなってきている中で、非常にジレンマを抱えている。皆さまから頂いたヒントをもとに、改めて生涯学習や市民活動も捉え直していきたい。

今日いただいたお話は、２月と３月の全体会というスタッフが集まる場において、共有させていただき、具体化しつなげていきたい。そして、来年度は生涯学習や市民活動についてご意見をいただければと思うので、引き続きぜひご議論いただければと思う。

【意見交換まとめ】


2021.1.31 第2回 ウィズあかし 専門委員会
「アサーティブコミュニケーション」とは？
→自分の気持ちをおさえこまず、互いに伝えあうコミュニケーショントレーニング。
「みもざの会」とは？
→グループ相談 1度に相談し合うことでの助け合いの効果を狙う。
当事者同士での気づき合い。
ファシリテーションの難しさ…
事業をたくさん手がけている。スゴイ。
自主グループ化していくケース。
うまくいく時も。一方、悩みがある方での課題も→専門のファシリテーターと相談したり。
抜けている分野などの精査は？
→ニーズと施策を踏まえて。
(市民生活) 男女共同参画課 「ジェンダー等推進計画」
(政策) SDGs推進室 「SDGs推進計画」
長岡
男女共同参画センター
多い分野 ・女性活躍 ・LGBTQ …
パワレス→自己決定 強そう
一般の人からすると少し遠い。福祉より？ 近づきたい。
課題意識あり。
他団体との連携の課題点は？
→どのような団体とすべきか。どうつながればよいか。
「すべての「女性」「相談」「支援」の経験」
地域の中での男女共同参画とのつながり。
→不登校のテーマ。ひっぱりやすい。家族の中で抱えている人から。
顔でも悩みを吐出せる窓口。SNS等？
→体制的は難しさ。県・国など広域に期待したい。
理解は連絡会程度
強い部分を活かし他は連携で対応は？
ex.起業支援→ハローワークに任せてしまう。
理解ある難民団体と組む
社会的包摂など
ex.・トモーコーヒー ・こども食堂 ・ビッコミュニティー ・ブックスポット …
地域での助け合いの場。
「あ、うちもしなきゃ…」と思わせられるか。
企業 広報担当部署 お客様相談 などからアプローチとしては？
企業を利用されている場合も。


連携していく団体のジェンダーの視点
いかに育むか。
シニア世代 古いタイプ
→「自分も大変だった…」という層を組めば…
→スタッフが講師となり、関係構築も含め、市民活動団体との連携も。
そのような団体を支援するとか。
エンカウンターグループのような非構成の場から、夫婦間のことなど語り合える場。男性などは入りやすいかも。
不登校親の会同士、顔が見える関係から主体性が育まれていく。親がすきなことが学びとつながる。
「会をどうよくしたいか」が互いに見えると連携
・豊かな生活を育むためにどうすべきか。
ウェルビーイング 個人の豊かさをどう育むか。
自立を育むためどこまで介入すべきか。
→きず。中全室化の場を提供すること。
「依存」に対して、卒業を促すか。
→責任負いすぎず。
シニア
「こういう場あるよ…」と促す。コーディネートする程度で専門家につなぐ。
「でも対応したらが…」 つまるところ
⇒男女共同参画センターとして提供すべき領域は？？
以前は「学習型」
今は「課題解決型」
・困難女性 ・DV …
行ったり来たりするもの。1時間の相談では効果薄い。
スタッフのメンタルケアは必須。
「生きるのヘタ会」(堂場)
「こんな人いるんだ」と受け入れられる。
タイトル、見せ方も大事。
(「男女共同参画」「人権」… コワイイメージ)
文化団体やウィズの複合施設として、連携しつつうまく見せる。
「心が新しい男の生き方」 圏域外から多数
↑
「子育て講座」 全然…
↳関係の対象圏やその出し方・効果。
ウィズ内でのすみわけ・連携
(「起業」、市民活動、「時間の使い方」
「男女共同参画」など各テーマ分野を、それぞれの分野からどうストーリーを描き合えるか。
男女 市民 生涯
各チーム・分野。